

# ドイツの旅

足立政男

- 一 森の民ドイツ人とその歴史
- 二 フランクフルトへ
- 三 ライン下り―ラインを制するものはヨーロッパを制す。
- 四 ケルン見学
- 五 ボン見学
- 六 デュッセルドルフ見学
- 七 ベルリン見学
- 八 ハンブルグ見学
- 九 ドイツ人観
- 十 ドイツ人の日本人観

## 一 「森の民」ドイツ人とその歴史

およそ原始時代のドイツ人（ゲルマン民族）が住んでいたのは北欧の大平原に群生した大森林の中であるから彼等の行動が活潑になったのは紀元前二世紀頃からであり、ローマ帝

政時代にはヨーロッパ州の東北部から森林地帯を抜け出して次第に南下し、ローマの国境を脅かしたが、ローマの強い間はつねに撃退されていた。彼等その頃の状態は、農耕と狩猟をいとなく、自然宗教を信仰し、数十の部族国家にわかれ、社会には貴族、平民、奴隸の別があり、貴族は従士を養う風



移住させねばならないとヒットラーは説き、いわゆる「血と土」を高くかかげ極端な民族至上主義を鼓吹し、一九三九年九月突然ポーランドに進撃し、イギリスとフランスもポーランドへの援助義務履行の名のもとに宣戦し、第二次大戦に突入した。これは東方大帝国をたてるための不可欠の戦争であつて、ドイツの覇権を認めようとなしないうフランスを降伏させた後には予定通りにソ連に侵入したが結局敗北して一九四五年五月無条件降伏をした。

敗戦後のドイツは、米・英・仏・ソ四ヶ国の共同管理を受けるに至つた。その結果、オーデル、ナイセ両川以東の約一萬五千平方キロメートルの地域をポーランドに割譲し、ザール地方は自治地域としてフランスに経済的に従属せしめられた。その後の東西陣営の対立の中に東西ドイツの分離がすすんで、一九四九年九月、ドイツ連邦共和国（西独）が誕生し、ついでドイツ民主共和国（東独）が誕生した。

しかしドイツ国民の統一国家への悲願は強く、かつ、アメリカが支持を与えた西独の経済復興はめざましく、一九五五年五月には主権を回復、NATOに参加し、一九五七年ザール地方をフランスから返還させた。いまや西独の生産力は西

欧第一となり、EEC諸国の中の指導的国家となつており、戦争による破壊からの復興は奇蹟的であるとして世界の驚異と羨望的になつているが、アメリカの支持は勿論、これはドイツ国民の質素、勤勉と合理主義的な性格によつて齎されたものであると言ひ得る。

（註） 参考文献 文英堂発行 最新世界

史数学研究社発行 新しい世界史

日本交通公社発行 外国旅行案内

世界文化社発行 世界文化シリーズ3

## 二 フランクフルト Frankfurt

九月二十四日十二時二十分、スイスを出國、ドイツに向う。右に世界の屋根、アルプスの白雪皚々たる神秘の山々が小窓に映るゼット機に思わず、人類の創り出した文明の偉大さとその進歩に感謝しつつ一路フランクフルト Frankfurt am Main. に飛ぶ。ドイツ南部のよく整理された農村、よく植林された森林地帯が手に取るようである。「われわれはゲルマン人の昔、大きな深い森のなかに住んでいた。その森を切り開き周囲を見廻わして見ると南方には頭のないラテン民族

が東にはスラウ民族が、北にノルマン人やアングロサクソン人種が住んでいることを発見した。そこで、ゲルマン人のきびしい活きんがための訓練と団結と戦闘的な性格が必然的に生れた」と何時かの機会に、誰かに聞かされたが、まさしくその通りである。黒々と続く黒林地帯、その間に点在するドイツの村落、そこにドイツ人を養い、ドイツ経済を支える資源があつたのである。ドイツがあれだけの戦災と灰墟の中から驚異的、かつ、奇蹟的な回復をなした一因はまさに、この健全そのものの農村と、美しく整理され、管理された森林資源のおかげであると思われる。

フランクフルトはゲーテの生地であり、マインツ川に沿つた古い歴史的な町である。第二次大戦で市の半分が壊滅したが、その復興も目覚しく、ベルリンにあつた金融機関のおもなものが、ここに移転しており、西ドイツにおける空陸何れの点においても交通の要衝にあたり、どこを歩いてても、活気に溢れ、戦災の跡が見えない。殊にマインツ川がライン河のはるか上流における一支流でありながら、貨物を満載した汽船が、実にキビキビと無数に往き来していることは一驚に値する。南独の、しかも北海から遙かに離れたこの奥地で、川

巾のせまいマインツ川がフランクフルトにおける輸送の大動脈としての役割を果しているのには全く驚いた。日本の川とは全然性格が異つており、一大運河といった方が適切であろう。聖パウロ寺院 Paulkirche、聖レオナルド寺院 Leonhard kirche、ドーム Dom、ゲーテの家 Goethehaus、市立美術館 Städtisches Kunstinstitut und die Städtische Galerie を見学する。ゲーテの家は博物館として、ゲーテの家庭（中世紀の上流階級）生活や資料が公開されている。一階は食堂、執務室、台所等がそのまま保存されており、生活様式がよく判る。二階は居間と音楽室で資料がよく整理され、ケースの中に展覧されている。三階はゲーテの父の書斎と母の居間、ゲーテの誕生した室などがある。周囲の美しい庭園と静閑な空気と、暖かい理解と教養のある父母の手で慈しみ育てられた彼が偲ばれて深い感銘をうけた。市立美術館ではヴァン・ダイクのマドンナを初め、レンブラント等名画に魅せられ、帰りはマイン河畔の散歩道 *Wizza* を歩く。珍らしい草木や花壇の間には数多くの科学的遊戯施設や幼児の遊び場を作って、子供の教育に熱心であり、かつ、大切にするドイツ人の特性がよく窺える。実に手入れの行き届いた河畔公

園である。マイツ川はフランクフルのシンボルのようなもので恰度、京都の町と加茂川といった具合で大切によく保護されていると言えよう。ただ異なるのは、その川が単に市民の憩いの場になっていただけではなく、利用面で交通運輸の大動脈になっていることで、これはまことに羨しい限りである。

中央駅 Hauptbahnhof に出る。米軍占領軍部隊が移動するためか、食堂の中央を陣取り、食事の最中で、アメリカ人の性格を丸出しの大きわぎを演じているが、被占領国として敗者の立場にあるドイツ人は無表情、かつ冷たい眼でこれを見守っている。果して心中はどうであらうかと察せられ、同じ敗戦国民として同情の念が湧かざるを得なかった。

### 三 ライン下りーラインを制するものはヨーロッパを制すー

九月二十六日フランクフルト Carlton Hotel を出発し、バスでマインツ Mainz まで一時間、マインツから遊覧船に来る。幸いなことに親切なドイツ人夫妻と同席す。彼等はオランダの国境近くにあるゲルドン Geldern の町に住み、遠く南独に商用に來たその帰途をライン下りで楽しもうというのである。数々の古城と伝説にくるまれたライン川はスイスの

ドイツの旅(足立)

山中に源を發して全長約一三〇〇キロメートル、ドイツ文化の緑や紅葉した丘に幾世紀かの長い歴史を秘め、かつ、凝視して來た美しい古城が船の右舷に或は左舷に出没する。その度毎に同席のドイツ人が説明し、写真にとれと勧めて呉れる。美しく整頓されたぶどう畠が丘の頂上まで展開することもある。兩岸には美しい村落や町もあり、まことにもって一幅の絵である。しかも鉄道が盛んに走っている。水上を上下する貨物汽船は貨物(資材・製品・石炭等)を満載しており、一日にライン川を上下する貨物船の数は二千隻余りもあるという。実に活気があり、船客にしきりに手を振って挨拶する平和なほえましい光景も見られ、ここにドイツ民族繁栄の大動脈と、ドイツ人同志の仲の良さが発見出来る。ラインを持つている限り、恐らくドイツは繁栄し、活気に満ちた勤勉な国民として、やがて欧州大陸で一番豊かな国となり、欧州に君臨するであらうと思われる。船が、有名な景勝地であるローレライに差かかると、Lurlei の巨岩と美しい紅葉した断崖が現われると、ハイネの詩がシルヒェルの作曲で奏でられ、船上に流されて來るとドイツ人達は一斉に合品を始めた。そ

の歌声が静かにローレイの巨岩まで川面を流れて行くのである。

かなしみに胸ふさぐ  
ゆえこそは知らねども  
ただそぞろ浮びくる  
古き世のものがたり

夕されば風冷えて  
ラインいま音もなし  
沈む陽に山の峯  
くれないに輝きて  
見よ 岩にすわりたる  
美しきのをとめ  
こんじぎの飾り映え  
くしげずる金の髪

ローレイは川の合流点で、水が渦を巻いて流れ、事実、上り下りする小舟にとっては大変な難所である。重なる遭難の悲劇がローレイ魔女伝説を生んだものと思われる。それにしても老いも若きも、ローレイの歌を合唱する彼等を見ていると、さすがに教養も高く音楽をよく理解し、詩人ゲータやハイネを生み、音楽の天才ベーターベンを育くんだ優秀

金の櫛うごかしつ  
かのをとめ歌うたう  
うたごえのあやしくも  
心ゆするそのしらべ  
小舟やる舟人は

聞き惚れてなやましく  
岩の上をあふぐのみ  
舟路をもきわめで  
ああ波に呑れなむ  
舟もその舟人も  
げに 歌のちからもて  
魔の岩のなすわざぞ  
(井上正蔵 訳)

な国民だどつくづく思われる。反面、鞏固な団結のもとに行動する恐ろしい民族だとも思われる。

午後七時三十分、ケルン Köln に着く。

#### 四 ケルン Köln 見学

九月二十七日 Mr. Beuth さんに厄介になり、ケルンを見て廻る。ケルンはライン地方の中心で、ボンの北方五〇キロメートル、ライン川をはさんで展開している人口八〇万の大都市である。十四世紀頃にはハンザ同盟の一中心地となった。第二次大戦中に大爆撃をうけ旧市街のほとんど九〇％が破壊され、いまだに廢墟の跡が見られ、当時の惨状が偲ばれる。商工業が盛んで、とくに工業都市として発展し、機械、電気器具、化学製品、繊維、食料品、車両、肥料などが主な生産品である。見るべきものとして、カテドラーレ Kathedrale の大寺院が、第二次大戦の大爆撃下にありながら、戦火をまぬがれ、その見事な尖塔が印象的である。正面二つの大尖塔は一〇九メートルもあり、内外の彫刻や装飾は実に立派で、一四八八年に起工されて六世紀もかかって建てられ、十九世紀に完成したといわれる。ドイツ人の実に気の長い、根気の

よさに思わず感心させられる。

偶然 Yabberath Villstr 16 Beuth Erna 夫人の家に泊めて貰うことになり、ケルンから遠く二〇キロメートル位は離れた片田舎の村であろうか、バスで同伴されて訪れる。全く見も知らぬ自分に一夜の宿をして欲待して戴く。その親切さは身にしみてこたえ、遠い外国で仏に出会った感じがする。おかげで、ドイツのよく整頓され、しかも、文化にめぐまれた農村風景と農家の姿を知ることが出来た。十畳敷位の部屋で、暖房設備やテレビ、飾り戸棚、来客用の食卓、応接用の椅子等のおかれたチリ一つなく掃除の行届いた部屋に通され、さすがに合理的なドイツの家庭生活と、清掃好きなドイツ婦人に感心させられる。特別に日本人向きの御馳走や、漬物類まで出していただき、感謝の念で一ばいになり、よいドイツの思い出が出来たことを心より喜ぶ。又ドイツ人の親切さには感心させられる。すべてが合理的で清潔でよく整頓されているドイツの家庭生活は日本人の学びとるべき点であろう。家の前は緑の芝生に真赤に咲いた草花が、風情をそえて美しい。この芝生と手入れの行届いた花壇は日本の庭園と同じようなものであろう。翌日は簡潔で、主婦の炊事に都合よく出

来、しかも合理的で清潔な台所も見せていただき、午前十時バス停留所まで婦人が見送って呉れる。ドイツ西北地帯の山一つない大平原には点々と森林があるだけで実にすばらしい眺めである。トラクターで農耕が行われ、農家は舗装された村の道に沿って建ち並んでいる。長閑な農村風景ではあるが、その中に立派な広い高速自動車道路が走っている。如何にもドイツらしい光景である。田園と森林と村落を幾つか通り抜けて、ケルン大学に帰り、大学の内外を見せて貰う、経済学部長の話では学生数二万、法、経、経営、理工、医、哲学の総合大学であり、経済は二五〇〇名の学生数であるとの話、緑の芝生と木立が校舎の立派な建物をとりまいている。隣りは広い公園で、実に健康的で申分がない。留学中の藤田順子さんに案内され、学生食堂で昼食したが、食堂は学舎から離れていて町のレストランと見間違えう感じ、インドネシアの留学生、許さんが親切に市内見学を案内して呉れる。セントマリア大寺院、カテドラーレ、アデナウアーがケルン市長時代に作ったといわれる大公園、メッセ、ライン川とカイザー皇帝の乗馬像などを見学してまわる。二度の世界大戦を引き起し、二度とも惨憺たる敗戦と占領軍の蹂躪にあい乍ら、なお

かつ、ドイツ帝国主義の象徴とも見られ、軍国主義のシンボルとも思われる、カイザー皇帝の乗馬像を残存してはばからないドイツ国民の動ぜざる負けじ魂に接した思いがし、つくづく恐ろしい国民だと思う。夜は許さんが支那料理で歓待して呉れ、ケルンの中央駅 Hauptbahnhof まで見送られ、汽車でボン Bonn に引返かえす。

## 五 ボン Bonn 見学

九月二十九日、朝方愛児が熱を出した夢を見て苦しんだあげく眼が覚めた。三重大学の大家教授と一緒にボン大学 Bonn Universität に行き、政経学部長の説明を聞く。単位履修方法の一例をあげると、商法総則を履習してゼミ、各論をとらせてゼミといったやり方で、ミッチリ基礎的学問をやらせており、余り科目を設けないやり方である。学力と思考力、判断力を充分身につけさせず方法だとも言える。

学舎の一部は昔のエレクトラル宮殿で、一七八三年フレデリック侯により大学になった。大学の門前は広い芝生と花壇があり、木立が深く、まるで植物園の中の一隅に大学がある恰好である。公園のベンチでは大勢の市民が日光浴をたの

しんでいる。乳母車にいたずら盛りの幼児を巧妙に革ヒモで縛り付けて落ちないようにし、遊ばしている風景はうらやましい位美しく感じられる。子供を大事にたくましく育てようとする点ではドイツ婦人がおそらくヨーロッパでは一番であろうと思われる。

ベートーヴェンの家は記念館となっていて彼の遺品や文献・資料等が大切に保存されている。ピアノのためのソナタ「月光」、その他彼の最後の楽譜などが陳列されていて、旅行者に深い印象を与える。ミュンスター広場 Münster-Platz の朝市では野菜・果物等が売られ、主婦達が買物籠をさげ、何れの国も同じ、買い漁っている光景は面白い。ロマネスク風寺院 ミンスター教会を通り抜けると、ポッペルスドルフ Pöppelsdorfer Allee の広い並木路に出る。泉水があり、喫茶店があり、芝生あり、彫像あり、実に美しい散策と憩いの場である。その突当りに、此の地の選挙侯の城 Pöppelsdorfer Schloss が濠をめぐらしてあり、実に立派な建物でその当時における勢力の強大さが偲ばれる。今は博物館と植物園になつて保存されている。

ボンの新聞社を訪ねたところ、日本における近代的オリソ

ピクスタジアムと人力車・芸者の二枚の写真が並べて出ていてびっくりする。人力車は向う鉢巻をしめてハッピを着た如何にも貧しそうな老人がよたよた姿で引いており、日本人の文明の低くさと生活苦を見せつけ、その手前に洋傘をさした芸者風の女性を入れて日本を紹介している。しかも、記者達の日本紹介の報道たるや、ドイツの記者達は土間（日本の畳の上のことを感ちがい）に寝かされ、足がフトンから出て寒かったといった調子の報道で、これには思わずドイツ人の日本に対する理解の低いのと、紹介というか、日本の宣伝の拙劣さに思わず憤慨し、日本大使館に行つて、もっと日本の良さとか、真実を知つて貰うように努力すべきではないかと、日本の出先機関の怠慢さをせめて見たが、あにはからん、それはドイツ人の不勉強さと、日本語のむづかしさにその責任があるので、彼等は日本を知らないのだという。そう言えば、アテネ空港の大世界地図に日本列島に一人の三味線を引いている芸者が一人だけ描かれていたのと全く同じ認識しか一般にはないのかも知れない。遠い東洋の島国、思えば無理からぬところがある。大使館は二階建ての小さなものであるが、日の来る丸の国旗に思わず敬意と日本民族意識が自覚されて

#### ドイツの旅（足立）

のも異国の旅における特殊な感情であらうか。

日本のもっとよい所を宣伝してもらいたい、日本の出先機関の怠慢をせめる心算であつたのに煙にまかれて帰る。夕刻、韓国大使館職員金東輝氏宅に行き、御馳走になる。日本人の私のために、ミン汁、米食等を中心にわざわざ、在独日本人の家庭から、日本の食料品を取りよせ、料理方法を在独日本人から学んで、日本料理を作つて欲待して呉れ、日本食を久しぶりに満喫し、感謝の念で一ぱいになる。異国の空で、仲よく希望に燃えた若い韓国外交官の家庭生活に花を咲かせる。午後七時すぎ、夫妻でデュッセルドルフ Düsseldorf、車で約一〇〇キロメートルを自家用車ベントで送つてくれ、幸運にもドイツの心臓ともいうべきルール Ruhr の工業地帯とドイツの陸の大動脈たる高速自動車道路を、時速百料から百六十料の猛スピードで疾走し見学する事が出来た。<sup>1)</sup>

ボン→ケルン間の高速道路はいわゆるヒットラーが作ったもので、彼の遺した功績の一つが今やドイツ復興への重要な役目を果している。彼の第二次大戦における破局と戦争の罪は重いが、一面偉大な人物であつたことも事実である。交差点の全くない、片側だけで三車線になつた実に立派な道路

である。トラック、乗用車が恐しいスピードでドンドン走る。ドイツ工業製品、原料品を積んだ超大型運搬車（電車の一・五倍位あると思われる）が高速度で走っているのを見ると、ドイツ復興への秘訣がここにあるのだということをつくづく思い知らされると同時に、ラインを征し、スピードで他西欧諸国に一歩前進し、勤勉と頭脳の明晰さで他西欧国民より優秀であるとするならば、これ又、西独諸産業の高度成長発展は当然の帰結であり、将来恐るべき民族であると考えさせられる。一時間余りで、Düsseldorf に到着し、ホテル Breidenbacherhof まで市内を探して送って呉れる。ここに誌上を通じ、異国での御親切に深く感謝する次第である。

(1) ルール地帯はドイツの心臓部とも云えよう。そしてラインを離さない西独は否ドイツは必ずや欧州大陸を制御するであろうと思われる。刃物で有名なゾーリンゲン附近や製薬で世界的に有名なバイエル工場都市が四キロメートル位つづいていて、大工場が一都市を形成し、附近に立派な道路網、アパート群、学校、文化施設を作り上げて例がほかにも幾つかあった。ルール地帯はまことに恐るべき国であると思われる。

## 六 デュッセルドルフ Düsseldorf 見学

ライン川の右岸にあり、ルール工業地帯の中心的工業都市でもある。鉄鉱業、金属工業、化学工業が盛んで、ライン川が、生産品の集散に重要な役割を果しており、川岸に波止場が無数にあり、ラインを上下する大きな船が出入し、実に活況を呈している。天然の良港（風波の立つ心配が絶対にならない）と、恐ろしく整備された輸送網（陸上の鉄道及び高速自動車道路）には思わず、ドイツ工業隆盛の根源を眼で見、身体で直接触れた感じである。

都市の中心部にある緑の芝生に美しい花壇と樹木が植えられた、並木道 Königallee は、大都市の公園を兼ねており、大公園 Hofgarten の池水や庭園とならんで、市民の休息地になっている。ライン川畔の子供のトンボリ噴水まで市庁舎選挙候 Jan Wellem の記念碑（一七二一年作）セント・ランベルト寺院（St. Lambertus 13~14c.）等を見学し、後は、日航事務所で現地駐在の日本人の話を聞く。翌日は Japan Trade Center, Düsseldorf Office で五十嵐某氏と英人 Jeffrey Edelson 2才 独人女性 Hodwate Adolf を交

え、西欧の国際事情について勉強する。(後述) 大いに得るところあり、更に、池田徳真氏(大昭昭六・卒 Oxford University)に三年学び一年間滞英し、現在 Dusseldorf 電工工業界で活躍中)と巡り会い、著書、「イギリス見聞記」を贈られ、更に、英、独、仏三国間の民族の相違、西欧民主主義の特徴、社会観、宗教観、教育制度、対日感情等々に就いて拜聴する。(詳細は後述)

## 七 ベルリン、Berlin 見学

第二次世界大戦における人類悲劇の落し子として誕生した陸の孤島ベルリン空港に十月三日午前十一時五分到着、この空港は空からベルリンへ来る玄関で、テンベルホフ空港 (Zentralflughafen Tempelhof) と呼ばれ、規模では世界一、大旅客機がすっぽり入る大きな屋根の下から発着出来るようになっていて有名であるし、ドイツ人の偉大さに感心させられる。

西ベルリンは鉄のカーテンの中の浮島のようなもので、西欧との連絡も飛行機の場合は三〇斤の幅、五〇〇〇フィートの高さに制限され、出入にはパスポート Passport が要求さ

ドイツの旅(足立)

れ、奇妙な感じがするが現実がそうなのだから、しかも厳しい制限下におかれているのだから致し方がない。終戦後、ソ連・米・英・仏の各占領軍によって四つの区 Sektor に分割され、ソ連はブランデンブルグ門からポツダム広場を結ぶ線の以東を、他の三国連合軍はその西側を統治し、四ヶ国の構成するベルリン管理理事会 Kammandatura の管理下におったが、一九四八年六月ソ連が管理理事会の解体を宣言するにおよんで、ベルリンは劃然と東西ベルリンに区別されることになった。<sup>(1)</sup>かくてソ連地区はドイツ民主共和国の首府となり、西ベルリンは西独の一州となっている。ところで、東西両陣営の冷戦激化は遂に、一九六一年八月十三日に東西ベルリンを分断する悲劇の壁となつて、容赦なく肉親や友人の仲をさいてしまった。西ベルリン市民の八〇%以上は東ベルリンに肉親や友人をもっているという。東側はブロックや鉄条網だけでなく、建物の窓までふさいで壁にしてしまった。東西ドイツ、ベルリンの境界線を東から西へ越えようとして東独警備隊に射殺されたドイツ人は、壁が出来て以来今日に至るまですでに二千人を越えているという。延々四五斤もある壁、民族の意志を無視し、そこに生れた幾多の悲劇が今もな

お統おといでいるのである。琉球列島、千島列島を失ったとはいえ、日本民族の方がはるかに幸せであると、異国の空で、永久的に固定化しつつあるベルリンの壁を前にしてつくづくと思ふ。

悲劇をたち切る道はただ一つ——統一しかない。しかし、その統一も、二十年の歳月を経た今日では最早や不可能視されるに至っているのが現地の実情であるように思われる。

西独政府は東独政府の存在そのものを認めず、ソ連は、統一をドイツ自身の問題だとしてとりあわない。強大な統一ドイツの出現を恐れる英仏両国も、表面はドイツ統一を支持していても、その本心は現状維持である。しかも「ベルリンの壁」以来、同じ民族間に全く異った思想の二つの集団が生れ、そこに同じであり乍ら互いに憎悪と不信が植えつけられつつあることは、更に両独統一を不可能にしつつある。まことに二十世紀後半の宇宙時代へと叫ばれる叡智に富むべき人類社会のもった悲しむべき歴史的事実である。この悲劇の壁も毎年クリスマス（3）に開かれ、肉親や親類のものが再会を喜んでゐるのはせめての慰みであるといえよう。

しかし、「この状態がつづくならば、もはや東西の新たな

人間的結びつきは生れず、親類も西側の自由を知っているものも減る一方で、東西ドイツはやがて全く違う人種の集団になってしまふだろう。実際に「壁」以後、西独でも、東独とその住民の運命に対して完全な無関心が広がりはじめている。これは実に不幸で危険なことだ」と考えてはいるが、全くその通りで、今や分割は恒久化しつつあり、余程の世界的一大異変が起らない限り、統一ドイツも、東西ベルリンの解消も希望が持てないと考えられる。

さて、ベルリンのメッセ Messе の見字に行く。各種新案の機械、テレビ、ラジオ、タイプの類から、ピアノ、家具、台所用品に至るまで無数に展示されており、ドイツ国内は勿論、外国の商工業者が参会し、盛んに取引している。殊に女性（4）が沢山参加しているのには驚いたり、感心もしたりで、広い会場を夕刻までかかって一巡する。二〇〇Vの電流ではあるが、両手を合せた位の実物大の小さな瞬間湯沸器が発明展示されていたが、大きくて場所的に邪魔になるガス湯沸器に取ってかわる時代が来るのではないかと思われる。このようなメッセが十三世紀に起源をもつといわれるハンザ同盟の諸商工業都市で絶えず開かれ、そこに新しい発明品が競って展示

され取引されて、その文化が国境を越えて交流し、競争し、創造と発明・発見へのたゆむことなき努力が続けられて今日に至ったところにいわゆるドイツ文明、否、欧州文化が形成されとも考えられる。つくづくヨーロッパにおけるメッセの存在価値が認識され、経済史を研究対称とする自分にとっては大収穫であった。夜は西ベルリン第一の繁華街クルフェルステンダム *Kurfürstendamm* を見物する。立派なホテル、レストラン、商店などが軒をならべ、広い歩道にはベルリン名物のガラス張りのショーケースが、並んで珍らしい都市風景である。このベルリンの銀座ともいわれる繁華街の東端、*Taunuzienstrasse* や *Kantstrasse* と交るところに *Kaiser Wilhelm-Gedächtniskirche* がすさまじかったベルリン大爆撃の当時の光景を偲ばせ「二度と戦争は起きない誓い」として、その残骸が保存されているのは、とても印象的で、悲劇のベルリンとしての感が深い。

翌十月四日、東西ベルリン観光バス（料金十二マルク）で視察に出かける。バスポートを見せ、署名、持参金の申告をしてバスに乗る。これは東ベルリンに入るときに必要な条件に

なるのでなかなか厳格である。最初西ベルリンの繁華街や裏街道を観光して廻り、表通りにおける復興の目覚しさと、同時に裏通りの大戦中連合軍側の猛空襲と市街戦による破壊の無残な姿そのままの場所を隠すことなく見せてくれる。やがて、ポツダム広場 *Potsdamer Platz* につくと遮断機をくぐり抜けてバスは所定の場所にとまる。最初バスに乗込む時に申告した。所持金簿・署名簿をもって東独兵が乗こんで来てバスポートと署名と写真を見て一人一人点検される。何んだかうす気味悪く思わず緊張させられる。小一時間駐車させられる。外では東ベルリン訪問の自家用車がやって来るが、運転車の乗客は全部降ろされ、車内の点検が実に厳格に行われる。運転台前のボックスは勿論、前後の座席シートまであけて検査し、新聞、雑誌等はすべて没収し、備えつけの没収箱に入れていく。車体の下は長い棒の先に反射鏡を取りつけたもので、隠匿物の有無を調べている。手続をするのであろうか、全部待合の小屋に連れて行かれる。遮断機も二重だし出入口は三重にも四重にもジクザクになったコンクリート壁を通り抜けねばならないようになっており、高い見張り台の上からは武装兵が銃口を出入口に向けて監視をつけてい

る。折しも、神経痛を病んでビッコを引いた七十才位の老人が東ベルリンを訪問し終って別れを惜んでいる光景に出会った。杖をつき、ビッコ足を引きずり引きずり、五六歩、歩いては振り返って手を高くあげて別れを惜しみながら、トボトボと淋しそうに西ベルリンに帰って行く悄然とした姿は、涙なくしては見られない東西ベルリンのポツダム広場における悲しい光景の一コマであった。同じドイツの国土に住み、同じドイツ人でありながら、全く変わった人間になったのであるとかと疑いたくなる。主義主張の相違も、ここまで来れば殺し合いが行われるのかと思うと、人類社会の悲劇をマザマザと見せつけられた感じがする。一方西側に設けられた観覧用の台上からは、東側の激しいやり方をカメラに撮ったり、手を振って、はるか東ベルリン市民の誰かに合図して元気で暮している事を確認し合っているようである。それにしても実に重々しい、悲しく淋しい気持ちで胸がいばいになり、遙かに平和で幸福な日本と日本人の同胞愛が身に浸みて嬉しく思われる。点検が終り、許可されたのであろう、東側の運転手と車掌が交替して乗り込んで来てバスは東ベルリン市内へ出発。ただしこの附近だけは写真が一切禁止され、撮影することが

出来ないのが残念である。バスはブランデンブルグ門からまっすぐ、ウンター・デン・リンデン通り（かつてのベルリン第一の目抜通り）を走るが、繁華さまなければ人もまばらで、爆撃と戦禍の跡もなまましく写真を撮ってもよいといわれるが、気が重くてとる気もしない。それでも建築された高層アパート群が見られることは復興と住宅確保への経済政策がつづけられている努力がよく判る。車はやがて、かつてベルリン王宮が威容をほこったマルクス・エンゲルス広場に着く。Mark-Engels Platz は立派な建物が焼け崩れて戦争の激しさを物語っているが、復興される日も近く、やがて東ベルリンの中心になるであろうと思われる。観光バスの終点であるソ連戦没兵士の眠るトレプトウ公園に着くと一行はバスから降りて、ナチ・ドイツとの激しい戦争のさなかにおけるソ連兵士たちの戦場の出来事を回顧するために記念碑として刻み込んだかずかずの白いレリーフの立ちならんだ参道に案内され、ソ連戦没兵士の慰霊塔に出る。美しく、静かな墓地に捧げられた花環が目にしむ。緑の芝生が一種の荘厳さをもって迫ってくる感じがする。こうべを深くたれ、ひざまずいて、平和を祈念する兵士の像には思わず、戦没兵士の悲しみがヒタヒ

たと胸に迫って来るようで、自らも敬虔な気持ちで大地にひざまずいて祈りたくなる。帰りはカール・マルクス大通り *Karl Marx Allee* を通る。広い並木道の両側には七階から十五階の近代的アパートが立ち並んでいるが、車掌は家賃が高いのでわれわれは住めないのだと皮肉な説明をして通過する。

再びバスがポツダム広場に帰着すると兵士が乗り込んで来て、一人一人バスポートと写真の点検をする。突然最後尾側面のドアが開かれ、座席の下をすかし、東ベルリンからの逃亡者が潜んでいないかどうかを調べられた時は、扉の真横に席を取っていただけに思わずビククリさせられた。西ベルリンに出てホットして緊張感がやわらぎ、自由の世界にもどった感じがする。ブランデンブルグ門 *Brandenburger Tor* の前に車が止まる。東西ベルリンの境になっており、ベルリンのシンボルでもある。その向こう側（東ベルリン側）が、昔のベルリン第一の繁華街ウンター・デン・リンデン大通りであり、この巨大な門自体は東ベルリンに属していて門の上にある四頭立ての馬にひかれたローマ時代の二輪戦車のブロンズ像の背に高々とひるがえる東独側の国旗が印象的で目にする。門をすぎると、ソ連戦勝記念碑が立てられ、戦車が置

#### ドイツの旅（足立）

かれ、いかめしい姿のソ連兵が武装して彫刻の様に佇立して守衛している。戦争の影が今になお厳しく、長くかつ深く残存していてうら淋しい。壁に沿った高層建築の窓という窓は、厚いコンクリート壁で塗りつぶされ、鉄条網で西側への脱走を防いでいる。壁の長さは延々四五キロもあるという。二十世紀後半の人間が作った一大怪物である。この壁を突破しようとして幾多の生命が失われたかと思うと暗い気持ちに襲われるのを禁じ得ない。

車は更にティアガルテン *Tiergarten* に入る。昔の緑都ベルリンの誇った大公園である。ベルリンの都心にこんな市民の憩いの場所があるとは夢にも思われない位立派である。普通の戦争の勝利を記念する戦勝記念塔がそのまま残されており、静かに流れるシュプレ川に沿った所にコングスハレー *Kongress Halle*（国際会議場）がある。一風変わった建築で、技術の粋を集め、力学を建築技術に表現し、ドイツ人の頭脳を具現したような建物である。一九三六年の *Olympiastadion* も観光コースに組み入れられ、水泳日本の名声をはせたプールサイドに立つて思わず往昔の想出に耽けざるを得なかった。

(1) 「外国旅行案内」一五六頁、日本交通公社発行

(2) 「遠のく統一への悲願」

ソ連は、ドイツとの抗争の歴史的体験から、自国の安全を確保するためには、ソ連占領地区ドイツを永久に社会主義体制の国家に塗りかえないことには安心できないと考えているようだから、西側の考えるような統一には関心がないどころか、根強いドイツへの恐怖と警戒心を抱いている。この点は東欧諸国も同様でソ連と全く一致する。そこでソ連の希望するところは①現国境線を固定化し、②東独の国家としての既成事実を最終的に認めさせ、③西独の核武装を防止すると同時に東欧諸国の結束を固め、政治的にも経済的にも西欧諸国と対抗できる体制をがっちり固めて国際紛争を解決しようと考えていると思われる。

一方、米国はアジアでベトナムに深入し、米中対決の危険を孕んでいる現在、欧州で目下おさまっているドイツ問題について東側と新たにことを構える意向もなければ余裕もないであろう。

英国の場合は、ドイツ問題を取上げるに当って、ドイツ問題と中部欧州における東西兵力の引離しを結びつけるなど、或は核拡散防止を含む軍縮、NATO、ワルシャワ条約と関連した中欧の安全保障等に関心をもっているだけである。

フランスに至ってはドイツ問題は欧州国家の問題だと

し、ドイツ問題の解決の責任から米國を締め出そうとはかる。又西側首脳のみならずドイツの旧東部国境地域の放棄についても発言したのはドゴール大統領だけであり、彼にしても恐らく西独が再び東独と合体し、現在以上の強大なドイツ国家となることは本来好んでいないだろう。つまりドゴール構想は、大西洋からウラルまで「欧州人の欧州」を唱え、そのワク内で、主としてフランスとソ連が管理しながらドイツの再統一を行なうという考えであるのに対し、西独はソ連とフランスによってドイツ再統一がなされることを不安に感じており、「欧州人の欧州」より北大西洋条約機構の強化を主張している有様で米國と結ぼうと考えている。

(3) 「再会喜びあう家族、『壁』開いたベルリン」

(昭和四十年十二月二十五日朝日新聞所載)

ベルリンでは二十四日、ブレゼントを持った約二万五千人の西ベルリン市民が日ごろ壁に隔てられている東ベルリンの家族や親類のもとを訪れ、イブの再会を喜び合った。十八日から始った二週間の壁の開放でこれまでのところ東ベルリンを訪れた西ベルリン市民の数は二十七万五千人に達し、更に二十五日には七万五千人の市民が東を訪れるものと予想されている。

(4) ボン大学教授の所見

## 八 ハンブルグ Hamburg 見学

ハンザ同盟の伝統を誇る特別市ハンブルグは西ドイツ最大の貿易港である。九月五日午前八時三十分ベルリンから飛行機で到着、直ちにホテルに入る。北極まわりの日本人観光団が一ばいである。「先生！」と呼びかけられてビックリ、自己紹介によって二十年前の教え子が、団体でヨーロッパ旅行に來たのだと言う。観光団一行は百四十名だという。日本人が大挙して欧州観光に來る事が出来るようになった国力の回復を喜ぶと同時に、それぞれ観光によって新しい西欧の知識を収獲して帰るであろうが、余りにも大集団すぎて、ケガでもしなければよいがな〜とつくづく思う。殊に老人がまじっていられるが無理だと思う。(恐らくヨーロッパを見て死にたいと思つて参加したのであるが)

ハンブルグは正式には、ハンブルグ自由ハンザ市 *Freie Hansestadt Hamburg* といわれ、リュubeck、ブレーメンとならんでハンザ同盟の三大自由都市として北エルベ川 *Norderelbe* の兩岸に發達したドイツ第二の大都市で人口も二〇〇万、西ベルリンにつぐ学問、芸術、文化の都である。

ドイツの旅(足立)

町の真ん中にアルスター湖があり、並木道にいろどられた湖畔には、外国公館や高級住宅、一流ホテルなどが並んでいる。この美しいアルスター湖はロンバルト橋によって外アルター *Aussen-Alster* と内アルター *Binnen-Alster* に分けられ、市庁舎・中央停車場・裁判所・議事堂・図書館・美術館が内アルスター側にある。内アルスター湖は夜になると無数の裝飾電光で一大不夜城となり、それが湖水の水に反射して旅人の目をまばゆい位に楽しませて呉れる。外アルスター湖はとても広く昼は無数のヨットが浮び、ハンブルグ市民のよき遊び場になっている。

夕食をかねて中央停車場 *Hauptbahnhof* に行く。エルベ川に開いたハンブルグ港が表玄関とすれば、ハンブルグ中央駅は商都ハンブルグの豪勢で斬新な裏玄関であるといわれている。

駅舎の広い一角でゆっくり食事をとっていると、突然「日本の友人よ！」と、四、五〇才位のドイツ人が肩を抱いてヒゲまみれの顔で頬ずりをされ、眼鏡が折れたり、カメラが傷つきはしないかと、ビックリさせられる。後で聞くと相当の年配のドイツ人は日本人に対し、戦友意識(第二次世界大戦

における）をもっており、その感情の発露だと言われ、納得する。

九月六日、民族博物館に行く。一般市民に開放日なのか、父兄に伴われた小学生が沢山見学に来ている。ハンブルグの石器時代から今日までの衣・食・住全般にわたる生活様式、生産様式、武器、戦争、乗物様式の変遷、特に船の発達、ハンブルグの町の発生から今日に至るまでの発展過程が各年代に亘って模型によって一目瞭然に判るように実に見事に展示し、郷土教育に力を入れている。長い間かかって作り上げたものである。すばらしく立派である。さすが、ドイツの誇る港町だけあって、実物大の船舶が出品されており、船舶の構造、操縦等を子供に自由に見せ、修得せしめている。或は、又、雷の発生、放電の実験と説明等子供に科学的な問題意識をもたしめ、その解明への驚くべき実験装置を設備して、科学的教育に力を注いでいるドイツ国民と、一方ではドイツ民族の今日に至るまでの苦闘と努力の跡を実際に目で見、身をもって体得せしめようとしている歴史教育尊重のドイツ国民を眼前に見せつけられた感じがして、感心もさせられるし、ゲルマン民族こそ、まことに恐るべき民族であると思つづく。

思わされる。

ハンザ同盟時代に活躍した船舶を見る事が出来たのは何よりの収穫であった。

民族博物館を出て少し行くと、ビスマルク記念塔 *Bismarck-Denkmal* がある。一九〇六年 *Ledder* や *Schandt* がつくった。実に堂々たる英姿の巨像が小高い丘の上に立てられ、ハンブルグの町を見下している。第一次世界大戦、第二次世界大戦を勃発せしめた張本人であり、しかも敗戦による惨憺たる被占領国として国土を占領軍に蹂躪されながら、なおドイツ帝国主義時代における英雄のシンボルたるべきビスマルクの彫像を、大事に保存し、日夜仰ぎ見ているゲルマン民族の傲慢さというか、ドイツ人の不撓不屈の精神というか、反骨精神には驚きもするし、感心もする。ハンブルグの町を眼下に見下し、市民に無言の激励を与えている巨像の温存や、国内至るところに見られたカイザー皇帝の銅像（乗馬姿の英姿）等を思い合わせ、ここでも将来恐るべき民族であり、不屈の精神をもったドイツ民族の真髓にふれた感じがする。

帰りにはブランテン・ウン・プロメン公園 *Planten un*

Blumen を散策する。ハンブルグは公園の町と呼ばれてもよいと思われる位、美しい秋の花、緑の芝生、立派な噴水等が公園を飾っており、無数の市民達が設備された立派な椅子（日本だったら一夜のうちになくなるだろうと思われる）に凭れかかって北欧の逝く秋を惜しみ、残り少ない陽光を浴びて静かに日光浴を楽しんでいる。日本等では見られぬ風景である。美しい公園を見るにつけても、西欧の人々の公園に対する概念は日本の個人の家の庭園と同一視し、何十年、何百年とかかって立派に保護し、育成し、かつ子孫に残すべき文化財産の一つと考えているように思われる。庭のない高層建築の何階かに住み、かつ一生涯を送ると仮定したなら、公園こそ市民共有の大地であり、大切な憩いの場所に相当することになるのであろう。この点でヨーロッパの公園の性格は日本の場合と全く違った特徴をもっているといえよう。それだけに公園は市民の共有財産であり、市民が子孫へ残す一大遺産の一つであり、長年月の間に育成して来た文化財であるとも言える。日本とは比較にならない位、投資もし、努力して保護し保存しているように思える。

ハンブルグにおける夜の遊びの世界にその名を知られてい

る「飾り窓の女」のいるレーパーバーン Reeperbahn は見ることが出来なかったが、見学者の話では（ホテルでの）日本語で話しかけられ、日本人として恥かしくて、残念な思いがしたとの事であった。恐らく寄港する日本の船員達が旅の恥はかき捨ての様に軽く考え、彼女たちにくだらぬ日本語を教えたものであろうとの事であった。国外に出る者の心すべき事であると思ふ。

九月七日、ゼトロに行き、日独貿易関係につき、第二次繊維製品（ブラウス、スポーツシャツ等）関係につき話を聞く、多少経済的に参考になる点があったのでその要旨をあげると凡そ次の如くである。

現在ドイツへ年間一〇〇〇万ドルの第二次繊維製品（ブラウス、スポーツシャツ等）を輸出している現状で、日本にとってドイツが第一の得意である。ところが先般日本のメリヤス業界グループの人々から日本のメリヤスやセーターが何故ドイツに出ないのかという質問をうけたが、それは次の諸条件によると思ふ。

(一) 日本の宣伝力の不足

ドイツの婦人、殊に若い女性達は合織のドラゴン等を着用

しているが、ドラゴン等は週間雑誌等に美しい、カラー写真で、ドラゴン着用女性の麗姿を入れて活潑に宣伝しているが、日本の場合は何一つない——たとえ、今から大いに宣伝したとしても、実物がドイツに輸入されるのは二、三年も先のことであろう。（実際に週間雑誌等を見せて説明して呉れたがつくづく日本の西欧に対する宣伝力の不足を残念に思う）。

(一) 値段の点で決して低廉でない。

これには一つの国際的な取引関係に原因がある。日本の自給自縛的なところがあり、その解決はむづかしいと思われる。

その一例は香港商品が非常に安価であり、これと日本商品が競争せねばならない立場にあることである。しかもこの香港商品たるや、原料は日本のメーカーから香港に直輸入し、香港における零細な家内副業の工場の余剰労働力と、低廉な賃金で加工し、（日本製ボンネルのマーク入りで）非常に安くドイツやアメリカに輸出しておる結果である。

このような関係にある香港商品と日本商品の販売競争を解決することは非常にむづかしい問題である。

(二) ドイツの電気洗濯器の構造が水から三〇度、四五度……九五度位まで煮沸しながら洗濯出来るように製作されてい

るため、日本商品は染色技術の点で劣っていて白い生地ものと一緒に洗えない欠陥をもっていることである。

以上の三点が日本商品のドイツへ進出を阻んでいる主要原因である。

なお、ドイツ人観について、或はドイツ人の日本人観については、ドイツを去るにあたって次の如くまとめ、ドイツの旅の終りとしてたい。

## 九 ドイツ人観

(一) 一般に礼儀正しく、笑顔で見知らぬ人とも応待し、ドアをあけたら、他人のためにドアを開いて待つ美德があり、一般に姿勢がよく、堂々たる態度で話をする。この点日本人は一般に目付がスルドク感じられ、姿勢もまずく対人態度はドイツ人に学ぶべき点が多い。

(二) 誠実な人も多い反面、商取引等におけるガメツさは、日本映画に出て来る「ガメツイ婆さん」の十倍以上の厳しさがある。これは容下二十度を越す厳寒の大陸に住み、四周に優秀なラテン民族やアングロサクソン等々の異民族との激しい競争場裡に生きて行かねばならないというゲルマン民族

の宿命ともいわれるべきものである。彼等には他民族に打勝つて自己の生存をはかることが第一であるといった民族的意識が根強く存在していて、ドイツ帝国時代の紋章である鷲のシンボルが一番よくその姿を表現しているともいえよう。<sup>(1)</sup>だから取引相手が言葉や文字等の判らぬ弱身の相手と見て取引した場合には九五%までは虚偽的なガメツきの盛りこまれた書類に Sign させるであろう。しかも彼等は法規一点張り、法で定められた範囲内での商行為は、如何に辛辣を極めていても、何等非難されるべき筋合はないといった合理主義に徹しており、契約違反等についての訴訟等は日常茶飯事的に考え、実に簡単に裁判沙汰に持込む。

この点、日本人のわれわれの意識とは非常に違っており、ドイツ人から見れば、日本人は実に甘い民族だと見られるに相違ない。考えて見れば日本人は楽天的な気楽な海洋民族である。いわゆる彼等は周囲の民族や自然とは対決して行く生き方であり、例えば寒さ一つとりあげても、寒さに対しては全館暖房設備といった合理的な生活態度をとるのに対し、日本人は寒さに対決するのではなくして融和して生きて行こうとする——非合理的の生活が見られる。

(三) ドイツ人の意識の中には、すべての面で指導的立場に立つ優秀人物は極めて一部であって、これ等の人物に国家の政治も経済も教育も委せておけば一番効率があがり、かつ、間違いないと考える。

換言すれば、一般大衆というものは自己の生活を守って行くことが精一杯であり、したがってこれ等の優れた一部の指導者に服従して行くことが最善の道であると考えるのである。ドイツにおける民主主義は、いわゆる指導された民主主義で、今もなお続けられているのが現状である。例えば、国内で指導的立場にある一政治家を一部の知識人が如何に攻撃しても、それに対する一般大衆は関心が全くないといってよく、批判が批判勢力にはならない。この点はドイツ人のもつ共通的な特質であり、したがって、将来、ドイツ人を指導し、引っぱって行くような人物、第二、第三のヒットラーの如き人物が出現する可能性が、ドイツ国家には常に存在するのである。これは金融をあずかる銀行の本店と支店の関係をとって見ても同様で、極端ないいかたをすれば、支店は本店の指図通りに動いておればよいのであって、日本の銀行のように、支店がその地域の預金額をたかめるために、預金者獲得に馳

けずり廻ってお互いに鎬を削るといった苦勞もなく、又勤務についても、企画、立案等は本店勤務の極く少数の、大学出の優秀社員の手握られており、他の平社員は恰も繰り人形のように命令通りに働いておればよいのである。かくて、大学を卒え、指導的地位にあるもののエリート意識には強烈なものがあるし、一方、被指導者は指導されるものとして立場を諦観的意識で割切っているのである。これはボンで聞いた話であるが、大阪府・市が開発のために行ったドイツにおける三億マルクに上る外債募集の逸話である。ドイツの銀行社長ア

スク氏が大阪を視察し、日本を見て帰国し、応募可否の会議を開いたところ、重役十三名中十二名の重役が大阪を知らないし、日本に対する認識がないため、そんな遠い、わけも判らない国に多額の投資はすべきでない、と一せいに反対したが、アスク社長唯一人が、自分は有望と考えるし、その結果末については自分が全責任をもつから応募すべきだとの賛成の一言でもって、日本の外債募集に対する応募が決定したとのことであることから、如何にドイツ国民のもつ民主主義意識というものが、指導者原理という不動の筋金によって貫かれた民主主義意識であるかがこの一事例によっても明らかである。

一般にいつてヨーロッパの社会は長い伝統と歴史があつて根本的な変革は不可能であり、身分的にも、いわゆる封建的などころが濃厚である。殊にドイツやイギリス等<sup>3)</sup>において甚だしい。

ドイツの場合、小学校三年が終ると大学進学のコースと、一般職業人になるコースとに選別され、（家庭事情による）職業コースに行くものにはタイプとか簿記とか職業人としての教育が施され、立身出世の道は封鎖される<sup>4)</sup>。概して西欧諸国家は封鎖的、封建的である。日本はその点頗る解放的であり、激しい大学進学への自由競争が行われており、そこには何等の抑圧もなく、むしろ受験地獄とさえ呼ばれる弊害が出て来ている。しかし乍ら大学生の数が百万人という膨大な数をもち大学教育を大衆化した日本の社会は、すべての面で社会そっくりが動き、かつ顕著な進歩をとげているといつても過言ではなく、恐らく二十年もすれば日本はドイツに追付き追越すであらうと思われる。日本社会の進歩は目覚しく、毎日が革新の途上にあるとも言える。

ドイツの一高官が日本を見て帰つた感想に曰く「○日本、独、米、ソ連の四大国が世界の四本柱だ。○日本の四つの島

は湯気を立てて霧進している。殊に百万近い日本人が八重洲口（東京駅）に垢のついていないシャツを着て整然と吸い込まれて行く有様は実に驚くべき現象だ」と。イタリヤやフランスには「日本恐るべし」といった感情が存在すると前に述べてきたが、ドイツ人には現在それがなく、自信満々である。この点、日本の対独関係は伊・仏関係より非常にやりよいように思われる。

#### 四 ドイツ婦人と家庭教育

ドイツ婦人の巨体と掃除好きは世界的に有名である。実によく働き、健康で、清潔好きである。在独日本女性がよく掃除するようにになると、ドイツ婦人の感化を受けたためだという合言葉が日本人の間で交わされる位、実によく掃除をする。チリ一本落ちていないことを誇りとしているのがドイツ婦人である。街頭を歩いていても床をシャボンで洗っているドイツ婦人をよく見かけたが、名実ともに勤勉と清潔はドイツ婦人の特徴と言い得よう。

さらにドイツ婦人の家庭教育、子供の教育は極めて厳格であり、躰は厳しく、ピンピンと尻を叩いて躰ける。彼女達は言う、「自分達の先祖は牧畜民族だから、躰は巧みなのだ」

と。飼犬を吠えないように、子供を温和しく従順に躰けることをドイツ婦人の心掛けとしている。たとえ、子供が泣いても甘えて泣いているか否かをよく判断し、甘えているときにはあやしたり、だいたりはしない。子供専用のホテルすらあり、子供を預けて両親が旅行することもあり、小さい時から独立自主の生き方を躰けるきびしさがある。又、幼児を次代の民族後継者として大切に健康に育てるために、美しい公園で乳母車に乗せて日光浴をさせている若い母親、或は博物館を見学させている子供連れの中年婦人達に至るところで出会った。又、テレビを見せ<sup>(6)</sup>ないで読書をさせるドイツの母親、「テレビ馬鹿」を早やくも見抜いて「考える」ということを尊重するドイツ婦人の家庭教育の在り方等を見聞した時には心の底から恐るべきドイツ民族と、その秘密の根源が早やくもドイツ婦人の家庭教育における躰にあることが思い知らされた。

#### (四) ドイツ人の複雑性と恐るべきドイツ民族。

ドイツ人は勤勉でよく働く、とても兩欧の働き振りとは比べものにならない位よく働く。これは前述したように、厳しい生存競争の中にあつて自己の生活圏を保持し、自己及び家族の生命を守るために懸命に働いている忙しい生活態度に見

受けられる。ドイツ国民はその象徴としての鷲にそっくりの国民性もち、弱い者にはノド笛目がけて飛びかかり、相手を征服し、喰ってしまうが、反面、相手が強いと見れば、足の裏でも嘗るといった性格をもつドイツ人である。傲慢さの反面、幾たびかの被占領、被征服民族としての狡さをもっているとも言える。この複雑な国民性は官僚達がそれぞれの地位或いは権限内で被治者、下級者に感張り散らす一面、上級者には盲従し、無批判的態度をとる。これはドイツの警官の態度によく現わされており、日本の警官とは比較にならぬ位民衆に感張り、民衆を指揮している。ただし、キビキビした態度でよく働き、コーヒーに入れる砂糖やジャムの分量から、電灯・ガス等に至るまで合理的な節約を行い、トイレットペーパーにさえ贅沢さは見受けられない。この生活態度はイタリヤやギリシヤ等では見受けられなかった現象である。生産面ではよく働き、消費面では節儉に徹したドイツ人こそ、やがて欧州大陸を制圧する民族であると思われる。恰も鷲の如くに！

(1) ドイツ民族は自分の領土は開つて取るものであるという考え方をもっている。その昔森を伐り開いて村落を形成したところが南方には頭のよいラテン民族が、北東

にスラブ民族、北西にアングロサクソン民族が住んでおり、その間にはさまれて力一ばい生き、かつ闘い抜いて来たゲルマン民族であった。

(2) 全体としてヨーロッパ人は優秀民族なのである。と云って人間は同じでなく、頭も中味も異っているのだ。人間は同じでないということが、民主主義の出発点となっている。だからといって世襲制や封建制は困る。そこで大衆の中には頭のよい人間がいて、大衆を指揮し、国家のリーダーになるべきである。この人間は同じでないのだという基本的考え方と、カトリック教の権威と秩序（順序よく列ぶ）を基調とする宗教で武装された思想とによって西欧の社会機構が作られ、平和が保たれているのが西欧民主主義社会である。したがって西欧民族は英雄意識をいずれもが多かれ少かれ抱いており、国家のリーダーたるべき英雄に引卒されて行くべきである。特にこの点ドイツ人は強烈である。又、したがってそこから生ずるエリート意識も強烈である。かくてこそ社会の秩序が保たれ、平和があるのでと考える。そうでなければ罪人であるべき人間はお互いに殺し合うものであるといった性悪説をもって人間を考えている。（デュッセルドルフにて池田徳真氏をはじめ駐在日本人談）

(3) Eton や Harrow の学生達は、一般人に対し、お前達とは人間が違うんだ。俺達は指導者になる人間なんだ

！といった考え方を強烈にもっている。又一般人もこれを認めている有様である。

(4) 大学進学コースは九年（高等学校も含めて）、高校卒業の時大学入試の国家試験（合格率四〇％位）に合格したものが大学に進学する。大学に進学すれば卒業に必要な単位はどこの大学で履修してもよくなっている。

一九六三年の大学生総数は二〇万二千名（うち、文科系五六％、理科系四四％）文科系では、哲学・文学・神学（五万六千）に学ぶものが多いのはドイツの特色であるといえよう。理科系は、医学三五％、機械一五％、数物一一％、自然科学一一％其他になっており、文科系、理科系いずれも卒業時に専門技術試験があり、合格者に資格が付与される。一九六三年度の合格者は一万一千八百人、博士の合格者は三千人といわれている。

なお職業コースは八年の修学期間が終る時、国家の性能テストがあり、それぞれに就職すると見習期間が約三年ある。これは各種の職種組合や大会社（約一〇〇〇社）が受入れる。見習最初の一年は月七千円位、二年目は八千円位、三年目は一万円位である。見習期間が終ると正式に職業人になる国家試験があり、合格すると一人前の待遇をうけ、企業界平均初任級四万五千円位で、結構生活して行ける。女子はタイプ、語学（英・仏）等を修学し初任級三万円位である。大体職人の子弟は職人になる

## ドイツの旅（足立）

というのが一般的通念である。

さきの大学進学コースの場合は、大学卒技術系十二万円、文科系十万円高卒は六万七千の待遇で日本に比較が出来ない程高級であり、男の場合職人四五十才になると約十万円になり生活は安定し、更にドイツの更生年金制度によって六十五才に達すると、月五万円は国家から更に、それぞれの企業から一万円宛て支給されることになっており、老後は何の心配もない。

日本のように何故、進学戦争が存在しないかといえば①上述のように日本の大学出位の暮しは職業コースを選んでも出来ること。②職業に貴賤観念がなく、親子二代に亘ってホテルのボーイを勤めるといった具合である。③上級者にはその指揮に服し、決して批判したりしない思想等による。

(5) ある夕暮、日本人の子供が屋外で遊び足りないで泣いて駄々をこね、母親を困らせていた。折しも通りかかったドイツ婦人が何故泣いているのか尋ね——それでは私がたいてあげましょうかといった逸話がある位、牝については厳格である。

(6) ドイツのテレビ局は二局しかなく、時間を定めて放送しており、しかも面白くない。日本のように何時でも放送しており、放送局が六局も七局もあるといった普及さとは比較にならない。テレビは人間を馬鹿にするから

中流以上の家庭では子供に見せないで読書をさせ、思考力の涵養に努めている。

## 十 ドイツ人の日本人観

さきに述べて来たドイツ人観の中でもすでにドイツ人がどのように日本人を見ているかには、ところどころで触れたが、ドイツでも、やはり、イタリヤ人と同じく、日本は遠くはなれた東洋の島国である。敗戦後の復興と経済成長には驚いているが、潜在的意識の根底にはドイツ人は日本人より一級上位の人間であると考えていることは見逃し得ない事実である。日本人を一夫多妻の国民だとか、オリンピックの関連報道として、人力車と芸者、或は着物の生活、土間（畳）に起居する生活が紹介され、洋服と靴・洋式ベットの生活を知らない未開な国民であるというぐらいにしか考えていないのがドイツ人大衆の日本人に対する認識である。彼等は原爆の発明も、宇宙船の発明もドイツ人の頭脳がしからしめたものであり、ソ連や米國に一時的にドイツ人の明晰な頭脳を貸しているにすぎないのであると、自らその優秀性を自負している。

しかし一面ドイツ人の中には、日本はドイツのよい得意先

で年間十五億ドルにも上るところの黒字貿易国であること。或は第二次大戦における戦友であるし、お互いに敗戦に終わったが同じように復興した国民であるとして極めて親日的であり、イタリヤやフランスに見られるような黄禍論の見方は存在しない。換言すれば、それだけドイツ国民には自信満々たるものがあって、日本人を親ているものとも言い得る。